

## 研究報告

# 看護学生の感情機能（情動知能）に関する縦断的研究（2） ——入学年度による相違——

A Longitudinal Study on Emotional Function (Emotional Intelligence) among Nursing Students (2) :  
Year-to-year Comparisons

小出水寿英<sup>1)</sup>, 野村光江<sup>2)</sup>, 菅佐和子<sup>3)</sup>

- 1) 関西看護医療大学 看護学部 精神看護学領域
- 2) 関西看護医療大学 看護学部 一般教養
- 3) 京都橘大学 健康科学部 心理学科

Toshihide Koizumi<sup>1)</sup>, Mitsue Nomura<sup>2)</sup>, Sawako Suga<sup>3)</sup>

- 1) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Mental health and Psychiatric Nursing
- 2) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Liberal Arts
- 3) Kyoto Tachibana University, Faculty of Health Sciences, Department of Psychology

## 要旨

本研究は、看護学生の情動知能の発達が入学年度によって異なるかを明らかにするため、異なる2つの入学年度の看護学生の1年次・2年次の情動知能尺度得点の比較および関連する性格特定・Self-Esteemの程度の比較を行った。小出水ら（2015）・野村ら（2015）と同一の4年制看護大学かつ入学年度の異なる学生を対象に、EQS（内山ら，2001）、日本語版 Ten Item Personality Inventory（TIPI-J; 小塩ら，2012）、およびR式SE尺度（菅，1980）を、1年次と2年次の2回にわたり実施した。その結果、全体的な得点分布としては小出水ら（2015）・野村ら（2015）と大きな違いが認められなかった一方で、情動知能と性格特性においては入学年度による学生の質の違いがいくつか認められた。Self-Esteemは、入学年度による違いが認められなかった。これらの結果と今後の展望について考察を行った。

**キーワード**：看護学生，情動知能，年度間の比較

**Keywords**：nursing students, emotional intelligence, year-to-year comparison

## 問題

看護実践においては、看護師が患者の状況に身を置き「わかってあげること」「一緒にいること」「尽くすこと」「条件を整えること」「信念を維持させること」など共感的・受容的な行為が看護の Caring（気づかい）の第一義的行為として重要である（Benner & Wrubel, 1999 難波訳, 1999）。共感や愛他心を含め、感情に関する機能は、情動知能（Emotional Intelligence; Salovey & Mayer, 1990）と呼ばれており、看護学生の教育過程において高い情動知能を醸成することが必要である（菅, 2010）。

情動知能の測定のうち自己報告式の尺度には、ESCQ（Emotional Skills & Competence Questionnaire; Takšić et al., 2009）や WLEIS（Wong and Law EI Scale; Wong & Law, 2002）などいくつかの尺度が開発されている。看護学生を対象に情動知能の発達を検討した先行研究では、内山ら（2001）が標準化した EQS（Emotional Intelligence Scale）がしばしば用いられており、学年進行に伴って、情動知能の尺度得点が上昇する学生と下降する学生の両方がいることが明らかにされている（中島ら, 2012; 宇津木ら, 2013）。こうした発達の個人差の背景にあるメカニズムを明らかにすることは、看護学生の情動知能の育成を考えるうえで重要な研究課題である。

筆者らは情動知能に関連する要因として、Self-Esteem と性格特性に着目し、看護学生を対象に縦断研究を行っている。他者を支援するためには、自己についての基本的な自信や安定感すなわち Self-Esteem が必要であり、看護学生は愛他行動として行う看護ケアを高く評価される経験を通して Self-Esteem を高揚させ援助への積極的な動機づけにつながると予想した。小出水ら（2015）は、情動知能と Self-Esteem との関連を調べ、少なくとも 4 年制看護大学の 1 回生では、情動知能と Self-Esteem との間に弱い正の相関がみられることが多いことを示した。同時に、情動知能のうち共感性は Self-Esteem と弱い負の相関の傾向を示すことも明らかになった。さらに、野村ら（2015）は個人差として 5 因子型性格特性に着目し、小出水らと同一の 4 年制看護大学学生を対象に 1 年次から 2 年次の学年進行にともなう情動知能の変化

と性格特性との関連を検討している。

しかしながら、小出水ら（2015）・野村ら（2015）のいずれにおいても、ある 1 学年の学生のみを対象としているため、得られた結果が看護学生の情動知能の発達の特徴とみなしてよいのか、その学年の特性なのか、切り分けることが困難である。情動知能の発達には実際の対人コミュニケーションの経験が大いに関係すると考えられるため、同一の大学でも入学年度が異なれば情動知能の発達の仕方に差異が生じる可能性がある。実際、風岡・川守田（2005）では、同じ看護短期大学の学生を対象に縦断研究と横断研究を組み合わせる結果を比較し、入学年度による学生の集団的特性があることを示唆している。そこで本研究では、小出水ら（2015）・野村ら（2015）と同一の看護大学で入学年度の異なる学生を対象に、小出水ら（2015）・野村ら（2015）を追認することを目的とした。

## 方法

**参加者** 小出水ら（2015）および野村ら（2015）と同一の 4 年制看護大学看護学科において、小出水ら（2015）・野村ら（2015）の調査対象者の翌年（以下、201X+1）に入学した学生のうち同意の得られた 92 名を対象とした。1 年次の 5-6 月、および 2 年次の 5-6 月に調査を実施し、2 回ともに有効回答の得られた 63 名（女子学生 51 名、男子学生 12 名）を分析対象とした。なお調査は無記名で実施した。各参加者には出身小学校・出身中学校の頭文字、誕生月、携帯番号の末尾を組み合わせる暗号化した ID を作成してもらい、1 年次のデータと 2 年次のデータを照合した。

**材料** 以下の 3 種類の自記式質問紙を使用し、それぞれの検査マニュアルに従って採点し得点化した。まず、情動知能の測定には EQS（Emotional Intelligence Scale; 内山ら, 2001）を使用した。これは自己対応領域、対人対応領域、状況対応領域の 3 領域全 65 項目に「まったくあてはまらない（0 点）」から「非常によくあてはまる（4 点）」までの 5 件法であり、得点範囲は 3 領域いずれも 0-84 点であった。次に性格特性の測定には TIPI-J（日本語版 Ten Item Personality Inventory; 小塩ら, 2012）を使用した。これは、10 項目で構成

され、Big Fiveの5次元（外向性、協調性、勤勉性、神経症傾向、開放性）について「全く違うと思う（1点）」から「強くそう思う（7点）」までの7件法で測定する尺度であった。得点範囲は2-14点であった。最後に、Self-Esteemの測定としてR式SE尺度（菅，1980）を使用した。これはRosenberg（1965）に採点法等の改訂を加えて開発され、10項目の質問に4件法で回答する。得点範囲は10-40点であった。

**手続き** 1年次、2年次ともに授業時間を利用して13-33名の小集団形式で実施した。1回あたりの所要時間は20分程度であった。

**倫理的配慮** 本研究は関西看護医療大学倫理審査委員会の承認を得て実施された。研究協力者に対しては、研究の目的や方法、自由意思に基づく参加であること、成績に関係しないこと、途中辞退が可能であること、研究協力の可否による不利

益がないこと、プライバシーは保持されること、データは研究以外の目的では使用しないこと等の説明を書面と口頭で行い、同意を得た。

**分析** 統計処理には統計ソフトウェアR version3.2.1を使用した。尺度間の相関にはPearsonの積率相関係数を用いた。入学年度・性別・調査年次の効果の検討には分散分析を使用した。

**結果**

はじめに、(201X+1)年度入学生の各尺度項目について基本統計量、および各尺度得点の1年次-2年次間の相関を男女別に算出し、表1に示した。女子学生の尺度得点は1年次-2年次間での相関が中程度以上に高く、比較的安定していることがうかがえた。一方男子学生では、EQSの自己対応領域・対人対応領域において1年次-2年次間の相関が弱い傾向にあった。

次に、男女別・調査年次別に見た尺度間の相

表 1. (201X+1) 年度入学生の基本統計量および1年次-2年次間の相関

	女子学生(N=51)			男子学生(N=12)		
	1年次 M(SD)	2年次 M(SD)	r	1年次 M(SD)	2年次 M(SD)	r
EQS						
自己対応	49.35 (12.65)	45.94 (13.06)	.60 **	47.75 (12.59)	43.50 (7.33)	.27
a. 自己洞察	13.55 (4.28)	13.63 (4.42)	.54 **	13.42 (5.04)	12.50 (3.06)	.13
b. 自己動機づけ	16.22 (5.04)	14.27 (4.93)	.65 **	14.08 (5.18)	13.00 (3.84)	.35
c. 自己コントロール	19.59 (5.60)	18.04 (5.60)	.64 **	20.25 (5.38)	18.00 (2.83)	.34
対人対応	54.39 (11.72)	52.53 (11.55)	.70 **	53.17 (14.56)	44.83 (8.81)	.55 +
d. 共感性	18.73 (3.34)	18.06 (3.37)	.60 **	17.17 (5.22)	14.00 (3.41)	.32
e. 愛他心	17.57 (4.50)	16.63 (4.23)	.58 **	18.75 (3.67)	15.58 (3.37)	.46
f. 対人コントロール	18.10 (6.32)	17.84 (6.06)	.75 **	17.25 (7.40)	15.25 (4.97)	.72 **
状況対応	38.24 (13.07)	38.31 (13.80)	.76 **	40.75 (19.56)	36.25 (11.87)	.77 **
g. 状況洞察	18.27 (5.47)	18.22 (5.51)	.65 **	20.75 (7.86)	17.58 (4.48)	.71 **
h. リーダーシップ	8.12 (4.71)	8.45 (4.86)	.78 **	8.58 (7.62)	7.83 (5.75)	.78 **
i. 状況コントロール	11.84 (4.08)	11.65 (4.39)	.60 **	11.42 (5.93)	10.83 (3.43)	.76 **
TUPI-J						
外向性	9.06 (2.93)	8.55 (3.02)	.66 **	6.92 (3.63)	7.42 (2.64)	.83 **
協調性	10.33 (2.21)	9.94 (2.25)	.53 **	10.92 (2.07)	10.42 (1.83)	.63 *
勤勉性	6.33 (2.53)	6.37 (2.42)	.43 **	6.75 (2.53)	7.67 (2.84)	.11
神経症傾向	8.71 (2.30)	8.84 (2.59)	.54 **	9.50 (2.35)	8.33 (2.27)	.68 *
開放性	7.96 (2.35)	8.04 (2.18)	.70 **	7.92 (3.18)	7.67 (2.27)	.61 *
Self-Esteem						
Self-Esteem	22.24 (4.51)	22.43 (4.71)	.75 **	22.33 (4.52)	21.92 (3.42)	.70 *

+ p < .10, \* p < .05, \*\* p < .01

関を表2に示した。EQSの下位尺度間の相関は、学生の性別や調査年次に関わらず中程度または高い正の相関を示した。EQSの下位尺度とTIPI-J・Self-Esteemとの相関は、学生の性別・調査年次に共通する傾向と、そうでない傾向の両方が認められた。自己対応領域得点は、女子1年次の勤勉性・神経症傾向とはほぼ無相関であるのに対して女子2年次において、勤勉性の間に中程度の正の相関 ( $r = .38, p < .05$ )、神経症傾向との間に中程度の負の相関 ( $r = -.36, p < .05$ )があった。男子1年次では自己対応領域と勤勉性との間に中程度の負の相関 ( $r = -.46, p > .10$ )があったが2年次では無相関になった。対人対応領域得点は、男子学生において、1年次・2年次とも外向性との間に中程度の正の相関があった（それぞれ  $r = .42, p > .10$ ;  $r = .43, p > .10$ ）が、女子学生では弱い正の相関のみ認められた。状況対応領域得点は、学生の性別・調査年次にかかわらず状況対応領域得点と外向性得点の間に中程度から高い正の相関が認められた ( $r = .45 \sim .79, ps < .05$ )。また女子1・2年次および男子1年次ではSelf-Esteemと中程度の正の相関を示した。

最後に、201X年度入学生のデータ（小出水ら、2015；野村ら、2015）と比較検討するため、各尺度の得点について、入学年度（201X年度入学・201X+1年度入学）と性別（女子学生・男子学生）を被験者間要因とし、調査年次（1年次・2年次）を被験者内要因とした3要因分散分析を行った。結果を表3に示す。

EQSについては、対人対応領域・共感性・愛他心の3項目において入学年次  $\times$  性別  $\times$  調査年次の交互作用が有意であった。このため、この3項目については201X年度入学生と（201X+1）年度入学生の両群について、性別  $\times$  調査年次の2要因分散分析を行った。その結果、対人対応領域においては、201X年度入学でも（201X+1）年度入学でも、調査年次の主効果が有意（それぞれ、 $F(1, 68) = 4.30, p < .05$ ;  $F(1, 61) = 7.42, p < .01$ ）で1年次に比べ2年次で点数の低下が見られたことを示した。さらに（201X+1）年度入学生は性別と調査年次の交互作用についても有意傾向であった ( $F(1, 61) = 2.99, p < .10$ )。次に共感性については、（201X+1）年度入学生でのみ、性別の主効

果と調査年次の主効果が有意であった（それぞれ、 $F(1, 61) = 7.92, p < .01$ ;  $F(1, 61) = 5.97, p < .05$ ）。愛他性については、201X年度入学生では調査年次の主効果のみ有意であった ( $F(1, 68) = 7.62, p < .01$ )。しかしながら（201X+1）年度入学生では、調査年次の主効果 ( $F(1, 61) = 11.80, p < .01$ )のほか、性別と調査年次の交互作用についても有意傾向であった ( $F(1, 61) = 3.46, p < .10$ )。

性格特性については、勤勉性において入学年次と性別の交互作用があったため、下位検定を行った。その結果、男子学生において入学年次の単純主効果が有意であり ( $F(1, 128) = 4.68, p < .05$ )、201X年度入学生よりも（201X+1）年度入学生の方が勤勉性が高いことが明らかになった。

### 考察

本研究では、看護学生を対象に入学年度による情動知能・性格特性・Self-Esteemの程度の違いを検討した。その結果、全体的な得点分布としては大きな違いが認められなかった一方で、入学年度による学生の質の違いも情動知能と性格特性において、いくつか認められた。Self-Esteemは、入学年度による違いが認められなかった。

EQSの得点について、入学年次の主効果が有意になった項目はなく、全体的な得点分布としては、201X年度入学と（201X+1）年度入学の学生の上に大きな違いが認められなかった。一方で、EQSの対人対応領域では入学年次を含めた交互作用が有意になり、入学年度による学生の質の違いがあることを示唆する結果も得られた。（201X+1）年度入学においては、201X年度入学と同様に2年次で愛他心の低下がみられた。この結果は宇津木ら（2013）とも一致した。本研究の（201X+1）年度入学生においては、愛他心の低下に加えて、共感性においても1年次から2年次にかけて得点が低下した。対人対応領域における得点の低下という意味においては、については、野村ら（2015）と整合性のある結果であると言える。

なぜ2年次で対人対応領域得点の低下がみられるのか、その理由にはいくつかの可能性が考えられる。一つは、自己の情動知能を評価する際の要求水準が、実際の発達程度よりも高くなった可能性である。小玉ら（2014）は医療・福祉系

表 2. 男女別・調査年次別に見た尺度間の相関

		a. 女子学生(N=61)																	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
EQS	1 自己対応領域	—	.84**	.89**	.89**	.63**	.40**	.55**	.58**	.63**	.66**	.51**	.59**	.21	.04	.38*	-.36*	.06	.32*
	2 a. 自己洞察	.76**	—	.63**	.58**	.45**	.42**	.42**	.55**	.55**	.66**	.43**	.45**	.15	.13	.21	-.18	.09	.23
	3 b. 自己動機づけ	.88**	.52**	—	.69**	.34*	.57**	.46**	.47**	.46**	.45**	.37*	.46**	.14	-.10	.28*	-.23	-.08	.22
	4 c. 自己コントロール	.68**	.49**	.69**	—	.52**	.28*	.46**	.51**	.63**	.62**	.52**	.62**	.26*	.09	.46**	-.49**	.14	.37*
	5 対人対応領域	.68**	.53**	.67**	.53**	—	.82**	.82**	.88**	.59**	.62**	.52**	.49**	.21	.23	.19	-.11	.01	.04
	6 d. 共感性	.49**	.49**	.45**	.33*	.75**	—	.64**	.56**	.40**	.40**	.27*	.20	.05	.20	.11	.20	.07	-.08
	7 e. 愛他心	.52**	.30*	.59**	.42**	.86**	.69**	—	.51**	.31*	.34*	.25*	.26*	.11	.29*	-.01	-.04	-.11	-.03
	8 f. 対人コントロール	.63**	.50**	.59**	.51**	.85**	.37*	.52**	—	.73**	.72**	.68**	.65**	.45**	.13	.30*	-.22	.09	.14
	9 状況対応領域	.69**	.54**	.65**	.65**	.63**	.28*	.34*	.78	—	.94**	.93**	.93**	.45**	-.05	.41**	-.51**	.30*	.45**
	10 g. 状況洞察	.68**	.54**	.54**	.65**	.57**	.26*	.34*	.69	.94**	—	.80**	.82**	.41**	.01	.31*	-.47**	.25*	.41**
	11 h. リーダーシップ	.49**	.44**	.35*	.45**	.58**	.29*	.26*	.74	.92**	.79**	—	.81**	.43**	-.11	.45**	-.43**	.34*	.41**
	12 i. 状況コントロール	.72**	.52**	.59**	.70**	.59**	.21	.33	.74	.89**	.75**	.72**	—	.43**	-.04	.40**	-.52**	.25*	.44**
TIPI-J	13 外向性	.15	.10	.14	.13	.10	-.16	-.16	.39**	.51**	.41**	.49**	.52**	—	-.10	.27*	-.13	.25*	.14
	14 協調性	.14	.09	.10	.16	.17	.16	.32*	.00	.02	.02	-.05	.11	-.32*	—	-.08	-.08	.02	.04
	15 勤怠性	-.02	.07	-.13	-.03	-.10	-.15	-.20	.03	.18	.11	.23	.17	.32*	.07	—	-.18	.38*	.32*
	16 神経症傾向	-.10	-.03	.00	-.20	.11	-.33*	.18	-.11	-.27*	-.24*	-.23	-.28*	-.17	.05	-.28*	—	-.03	-.44**
	17 開放性	.01	.07	-.12	.07	-.07	.01	-.12	-.05	.12	.10	.19	.04	.32*	-.19	.29*	.02	—	.22
Self-Esteem	18 Self-Esteem	.05	.00	-.09	.18	-.05	-.19	-.11	.09	.37*	.34*	.34*	.34*	.39**	.08	.55**	-.28*	.38*	—
		b. 男子学生(N=12)																	
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
EQS	1 自己対応領域	—	.68*	.80**	.77**	.34	.06	.41	.28	.49	.57*	.26	.51*	.30	-.49	-.01	-.05	.31	-.19
	2 a. 自己洞察	.87**	—	.25	.35	-.19	-.11	.01	-.27	.20	.29	-.03	.35	-.05	-.49	-.21	-.09	.04	-.26
	3 b. 自己動機づけ	.69*	.36	—	.45	.57*	.31	.48	.48	.33	.27	.27	.33	.25	-.26	.12	.15	.24	-.10
	4 c. 自己コントロール	.86**	.75**	.31	—	.30	-.14	.39	.36	.61*	.80**	.34	.50	.50	-.39	.03	-.23	.44	-.08
	5 対人対応領域	.82**	.82**	.50*	.68*	—	.78**	.75**	.72*	.39	.47	.32	.21	.43	.25	.32	.44	.27	-.49
	6 d. 共感性	.76**	.75**	.51*	.57*	.95**	—	.69*	.23	-.13	.06	-.16	-.26	-.06	.36	.06	.58*	-.06	-.72*
	7 e. 愛他心	.70*	.69*	.46	.55*	.82**	.89**	—	.19	.02	.44	-.23	-.13	.03	.15	-.23	.52*	-.13	-.71*
	8 f. 対人コントロール	.74*	.74*	.40	.66*	.89**	.72*	.48	—	.77**	.49	.83**	.64*	.79**	-.09	.68*	-.03	.60*	.12
	9 状況対応領域	.66*	.76**	.10	.74*	.72*	.57*	.38	.83**	—	.80**	.91**	.90**	.72*	-.09	.49	-.27	.68*	.13
	10 g. 状況洞察	.63*	.63*	.21	.69*	.73*	.66*	.52*	.71*	.88**	—	.51*	.59*	.45	-.15	.02	-.04	.39	-.24
	11 h. リーダーシップ	.59*	.70*	.06	.67*	.67*	.50	.26	.85**	.96**	.77**	—	.80**	.73*	.03	.65*	-.32	.73*	.29
	12 i. 状況コントロール	.59*	.78**	-.02	.67*	.54*	.37	.21	.70*	.89**	.60*	.88**	—	.69*	-.18	.57*	-.34	.74*	.28
TIPI-J	13 外向性	.23	.43	-.14	.27	.42	.23	.03	.65*	.79**	.64*	.80**	.75*	—	.05	.81	-.16	.65*	.08
	14 協調性	.06	.30	-.14	-.01	.41	.41	.31	.38	.22	-.03	.36	.30	.25	—	.33	.09	.06	-.33
	15 勤怠性	-.46	-.37	-.18	-.56+	-.08	-.01	-.14	-.09	-.07	.01	-.01	-.27	.17	.31	—	-.24	.73*	.20
	16 神経症傾向	.12	.11	.18	.01	.14	.24	.43	-.12	-.26	-.26	-.33	-.09	-.22	.23	-.28	—	-.63*	-.38
	17 開放性	.27	.41	-.38	.60*	.45	.35	.35	.46	.59*	.51+	.57+	.55+	.45	.28	-.17	.13	—	.21
Self-Esteem	18 Self-Esteem	.09	-.03	-.13	.35	-.05	-.21	-.29	.20	.47	.37	.45	.47	.49	-.28	-.05	-.23	.36	—

注) 左下は1年次、右上は2年次のデータを示す。\* $p < .10$ , \*\* $p < .05$ , \*\*\* $p < .01$

表 3. 入学年度・性別・調査年次を独立変数、各尺度得点を従属変数とした 3 要因分散分析の結果（F 値・p 値）

	入学年度(A)	性別(B)	調査年次(C)	A x B	A x C	B x C	A x B x C
EQS							
自己対応	0.04	0.07	2.43	0.37	2.77 <sup>+</sup>	0.27	0.78
a. 自己洞察	0.18	0.23	0.02	1.75	0.54	0.35	0.23
b. 自己動機づけ	0.00	2.55	2.86 <sup>+</sup>	0.10	2.46	1.31	0.03
c. 自己コントロール	0.05	0.19	3.65 <sup>+</sup>	0.02	3.20 <sup>+</sup>	0.55	2.11
対人対応	0.01	1.27	<b>11.70</b> <sup>**</sup>	0.65	1.28	0.94	<b>4.71</b> <sup>*</sup>
d. 共感性	0.00	3.78 <sup>+</sup>	<b>7.97</b> <sup>**</sup>	3.63 <sup>+</sup>	1.50	0.66	<b>4.51</b> <sup>*</sup>
e. 愛他心	0.68	0.05	<b>19.41</b> <sup>**</sup>	0.02	0.78	0.93	<b>4.21</b> <sup>*</sup>
f. 対人コントロール	0.11	1.34	2.55	0.09	0.47	0.41	1.52
状況対応	1.04	0.00	1.46	0.00	0.41	0.56	1.66
g. 状況洞察	0.50	0.78	3.31 <sup>+</sup>	0.00	0.95	1.84	2.30
h. リーダーシップ	0.88	0.15	0.05	0.10	0.08	0.03	1.51
i. 状況コントロール	1.44	0.26	0.56	0.06	0.05	0.01	0.16
TUPI-J							
外向性	0.01	<b>7.78</b> <sup>**</sup>	0.01	0.00	0.01	2.78 <sup>+</sup>	0.49
協調性	0.17	1.90	3.27 <sup>+</sup>	0.00	0.09	1.39	0.82
勤勉性	0.79	0.13	1.22	<b>4.72</b> <sup>*</sup>	0.34	0.17	1.58
神経症傾向	1.55	0.10	0.47	0.41	2.67	0.13	7.23
開放性	0.01	0.41	0.70	0.03	0.30	0.06	1.02
Self-Esteem							
Self-Esteem	0.05	0.01	0.77	0.09	1.63	0.28	0.17

<sup>+</sup>p < .10, <sup>\*</sup>p < .05, <sup>\*\*</sup>p < .01

の学生と社会人（看護師・介護士）の比較を行っている。その結果、学生の方が社会人よりも情動スキルの自己評価が高いのとは対照的に、感情語彙の質や心情の読み取りといった実際の情動スキルでは社会人の方が高成績であることを明らかにしている。小玉らの調査対象者と同様に本研究の看護学生も、1年次には「他者の感情が十分に理解できていないことすら分からない」状態にあり、1年次から2年次にかけて、情動知能を発達させると同時に自己の情動知能を評価するスキルを向上させるため、見た目上得点が低下する結果となる。もう一つは、他者のネガティブな感情に対して共感性や愛他心を高く保持することは、自分自身が情緒的に消耗するリスクとなるため、共感性や愛他心の発揮を抑制したという可能性である（Gleichgerrcht & Decety, 2013; 宇津木ら, 2013）。

情動知能と性格特性との相関については、野村ら（2015）に一致する点・不一致の点の両方があった。たとえば、自己対応領域と開放性の正の相関や、状況対応領域と外向性の正の相関、状況対応領域と神経症傾向との負の相関などは野村ら（2015）と一貫していた。今後はデータの蓄積を行いつつ、学生の個人差との関連を考慮した看護学生の情動知能の発達の軌跡を明らかにすることが望まれる。

平井・橋本（2011）は看護短期大学生を対象にEQSを実施し、状況コントロール等において男子学生の方が女子学生よりも高得点であったことを報告しているが、本研究では、いずれの入学年度の学生でもそうした傾向は認められなかった。本研究では共感性において性別の有意傾向が認められたが、これは女子学生の方が高得点であったことを反映している。平井・橋本（2011）と本研究のいずれにおいても男子の学生数が限られていることから、両研究の結果の相違は、看護学生の個人差の影響によるところが大きかった可能性が考えられる。学年間の得点の相関に着目すると、先行研究では最低でも $r = .47$ （宇津木ら, 2013）と報告され、本研究でも女子学生では中-高程度の正の相関を示した。これらのデータと比較すると本研究の男子学生の回答は、EQSの自己対応領域・対人対応領域において1年次と2年次の得点の相関が高くなく、何らかの誤差の混入や、回答する際の基準の不安定さがあった可能性が示唆される。

本研究では、性格特性についても性差が認められた。性格特性のうち勤勉性において入学年度と性別の交互作用があり、男子学生では201X年度入学生よりも（201X+1）年度入学生の方が勤勉性が高いことが明らかになった。上述の議論と同様に、男子学生の人数が限られているうえ、（201X+1）年度入学生は勤勉性得点の1年次-2

年次間の相関がほぼ無相関であり、今後のデータの蓄積が期待される。この他にも、いくつか性差が確認された。まず本研究では入学年度によらず一貫して、女子学生の方が男子学生よりも外向性が高かった。これは Feingold (1994) のメタ分析の結果に一致する。一方、一般的な性格特性の性差と、本研究の結果が異なることも明らかになった。一般に女性より男性の方が調和性が高いことが報告されている (Feingold, 1994; Nettle, 2007 竹内訳 2009) が、こうした傾向は本研究では確認されなかった。さらに Self-Esteem においても、一般には、わずかながら男性の方が高いことが報告されるが (Feingold, 1994; Kling, et al., 1999), 本研究では性差が認められなかった。男子学生が女子学生と同等に高い調和性を持つことや、女子学生が男子学生と同等に高い Self-Esteem を持つことは、対人援助職である看護師を目指す学生として適応的と考えられる。本研究の結果は看護学生の特性を表すものと考えられるかもしれない。

Self-Esteem と情動知能との関連について、201X 年度入学生では、Self-Esteem と EQS の共感性因子との間に弱い負の相関が認められることを明らかにした (小出水ら, 2015)。これに対し、(201X+1) 年度入学生では、男女ともに1年次に弱い負の相関を示したが、2年次女子ではほぼ無相関になるなど結果が一定しなかった。相関がないというよりは、Self-Esteem が高いと同時に情動知能も高いという適応的な状態にある場合や、Self-Esteem の低さが対人対応領域における情動知能の高さにつながっている場合 (小出水ら, 2015) など、Self-Esteem と情動知能の関連のしかたが複数存在し、それらが混在している可能性が考えられる。相関の有無を確認するだけでなく、その背後の心理過程について検討することが今後の課題として残されている。

本研究の対象となった看護学生たちは、2年次後期に成人看護学実習、3年次に領域別臨地実習を経験する。看護実践を通して多種多様な患者とのコミュニケーションを経験することによって、情動発達とはどのような成長を遂げるのか。先行研究では、EQS の得点がいったん低下したのち、4年次で得点が上昇する例も明らかにされている (宇津木ら, 2013)。本研究の看護学生たちの今後

の成長と発達が期待される。

## 文献

- Benner, P. & Wrubel, J. (1999) : The Primacy of Caring. Addison-Wesley Publishing Company. (ベナー, P.& ルーベル, J 難波卓志 (訳) (1999) : 現象学的人間論と看護. 医学書院 東京. 536p)
- Feingold, A. (1994) : Gender differences in personality: a meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 116 (3) , pp.429-456.
- Gleichgerrcht, E., Decety, J. (2013) : Empathy in Clinical Practice: How Individual Dispositions, Gender, and Experience Moderate Empathic Concern, Burnout, and Emotional Distress in Physicians. *PLoS ONE*, 8 (4) : e61526.
- 平井由佳, 橋本由里 (2011) : 看護学科における男女学生の情動知能特性の検討, 鳥根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, 5, pp.19-26.
- Kling, K. C., Hyde, J. S., Showers, C. J., & Buswell, B. N. (1999) : Gender differences in self-esteem: a meta-analysis. *Psychological Bulletin*, 125 (4) , pp.470-500.
- 風岡たま代, 川守田千秋 (2005) : 学年別比較による看護学生の共感性に関する一考察: 2回の横断的比較とその中の経年的比較から. *日本看護研究学会雑誌*, 28 (5) , pp.81-86.
- 小玉有子, 奈良知子, 戸来睦雄, 齋藤三千政. (2014) : 医療・福祉系学生の情動知能とスキルに関する研究: 学生と看護師・介護士の情動スキルの比較. *弘前医療福祉大学紀要*, 5, pp.31-38.
- 小出水寿英, 野村光江, 西垣里志, 菅佐和子 (2015) . 看護学生の感情機能（情動知能）に関する縦断的研究（1）—ベースラインにおける情動知能と Self-Esteem の関連性—, *関西看護医療大学紀要*, 7, pp.27-35.
- 厚生労働省 (2011) : 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書.
- 文部科学省 (2011) : 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告.
- 中島正世, 金子直美, 澤田和美. (2011) : 看護学生の情動知能の1年次から2年次への変化. *日本看護学会論文集. 看護教育*, 42, pp.3-6.

- Nettle, D. (2007) : Personality: What makes you the way you are. Oxford: Oxford University Press. (ネットル, D. 竹内和世 (訳) (2009) : パーソナリティを科学する 白揚社, 279p)
- 野村光江, 小出水寿英, 西垣里志, 菅佐和子 (2015). 看護学生の情動知能の発達—性格特性との関連—, 関西看護医療大学紀要, 7, pp.36-44.
- 小塩真司, 阿部晋吾, カトローニ・ピノ (2012) : 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, pp.40-52.
- Rosenberg, M. (1965) : Society and the Adolescent Self-image, p.326. Princeton University Press.
- Salovey, P., & Mayer, J.D. (1990) : Emotional intelligence. Imagination, Cognition, and Personality, 9, pp.185-211.
- 菅佐和子 (1980) : 大学生の Self-Esteem についての実証的研究 (1), 愛知医科大学医学会雑誌, 8, pp.77-81.
- Takšić, V., Mohorić, T., & Duran, M. (2009) Emotional Skills and Competence Questionnaire (ESCQ) as a self-report measure of emotional intelligence. Horizons of Psychology, 18, pp.7-21.
- 菅佐和子 (2010) : 看護学生の情動知能 (EQS) に関する縦断的研究 (1) 日本ヒューマンケア心理学会第 12 回大会発表論文集 p.36.
- 内山喜久雄, 島井哲志, 宇津木成介, 大竹恵子 (2001) : EQS マニュアル, 実務教育出版, 東京. 64p
- 宇津木成介, 島井哲志, 橋本由里, 菅佐和子 (2013) : 看護学生の感情知能に関する縦断的研究, ヒューマン・ケア研究, 13 (2), pp.89-100.
- Wong, C. S., & Law, K. S. (2002) : The effects of leader and follower emotional intelligence on performance and attitude: An exploratory study. The Leadership Quarterly, 13 (3) , pp.243-274.

## 謝辞

紀要編集委員会の先生方および森原由里香氏より貴重なご助言を賜りました。深く感謝申し上げます。